

王女の猫の話

—カレル・チャペック—

中野好夫譯

昔、ある國に王様がいらつしやいました。大變幸福な王様で、ミ申しますのは、人民達はよく王様の御命令を守りますし、いざこいふ場合には、みんな大變忠義な人達でありましたから。ミころが時々、たつた一つ困つた例外が御座いました。それは可愛らしい王女様でありました。

ある日王様は、この王女様に、お城の石段で手毬遊びをしてはいけませんミ、かた^{いひつけ}とお命令になりました。それがさうでせう。乳母がほんの一すうさくしてゐた間に、もう王女様は手毬をもつて石段へいらつしやいました。天罰でせうか、それさも悪魔の悪戯なのでせうか、王女様はさうした機みか石段をコロコロと轉んで、お膝に怪我をなさいました。で王女様は石段に坐つて、大聲で泣いていらつ

しやいました——ほんきに、もしこれが王女様でなかつたならば、四邊近所にわめき散らしてゐたミ言つた方がよいかもしれません。侍女達は早速、綺麗な水晶の水鉢を持つてくるやら、絹の繻帶を持つて来るやら、あはてふためいて飛んで參りました。まだそれから十人のお醫者ミ三人のお坊様が見えましたが、誰一人王女様の痛みをなほすこゝミが出来ませんでした。

丁度その時一人の老婆が、ピッコを引きながら、お城の前を通りかゝりました。王女様が石段で泣いていらつしやるのを見るに、つか／＼と跪いて、やさしくこう申しました。『王女様、王女様、ヤレ／＼お泣きになるものぢや御座いません。この婆やがそれはそれはいゝものを差上げませ

うから。それは眼はまるでエメラルドの様に緑い眼をして居ります——でも誰も盗つて行きやしませんから。それから、こんなに長いお髻も御座いますよイエエ、人間ぢや

御座いませぬとも、そうそう、それからキラ／＼火花の出る毛皮を持つて居りますよ、エ、でも火傷やけどなんぞ決してしやしませんから、それから絹の足指を持つてますよ、しかも決して摩り切れたりなんぞしない：：それからまだ、衣囊かぶこの中には十六本の小刀を持つてみましたつけ、でも無論お肉なんぞを切るんぢや御座いませぬ。サアこの婆やが、そんないゝものを持つて来て差上げますから、王女様はきつ／＼お泣き止みになりますね。」

王女様は驚いてお婆さんの顔をじつ／＼御覽になりました。まだ片つ方の眼には涙がキラ／＼光つて居りましたが、一方の眼はもうニコ／＼と笑つていらつしやいました。『でも婆や、王女様は仰言ひました。』でも婆や、そんなものゐないぢやないの。」

『イ、エ、居りますよ、居りますよ。』婆やは申しました。『その代りに王様がこの婆やの欲しいものを下さるな

らば、婆やは直ぐ持つて参りますよ。』そう言つてまた婆やはトボ／＼と行つてしまひました。

王女様はまだ石段の上に坐つてゐましたが、もう泣きやんでゐらつしやいました。そしてそんな黙つて一體さんなものだらうと考へてゐらつしやいました。しかし、婆やが行つてしまつて、もう結局それが貰えないのだと思ふと、王女様は急に悲しくなつて、またしてもシク／＼泣き出してしまひました。丁度その時王様は窓から外を御覧になつてゐらつしやいましたが、何故そんなに王女様がお泣きになるのか、お訊ねになりました。する／＼直に一部始終はお解りになりました。知らない老婆がいかにも上手に王女様をなだめて泣きやませた話をお聞きになりますと、王様は大にや顧問官にかこまれてもこの玉座にお著きになりました。がさうしたことが、老婆の言つた獸のこゝが妙に王様の頭にこびりついて居りました。そして幾度も獨り言を仰言ひました。『成程、エナラルドのやうな眼をもつて、だが誰も盗つて行きはしない。こんなに長い髻があつて、それでゐる人間ぢやないよ。毛皮から火花が出る、だが火傷は

しない。絹の足指をしてゐるが、摩り切れはしない。衣囊には十六本の小刀を持つ、が無論肉を切るのではない。ハテナ？大臣達は王様が何かしきりに獨り言を仰言つては、頭をうなづいて見せたり、さうかと思ふに兩手で御自分の顎に長いお髻でも生えてゐるかのやうな恰好をして御覧になるのを見て、何の事だか合點が参りませんでした。で到頭老内大臣長が恐るゝ王様にお伺ひ申上げました。

『いや實は考へ事をしてゐるのじや、一體それはどんな駄だらうと思つてな。』王様は仰せられました。『エメラルドのやうな眼をもつて、だが誰も盗つて行きはしない。こんなに長い髻があつて、それでゐて人間ぢやない。毛皮から火花が出る、だが火傷はしない。絹の足指をしてゐるが、摩り切れはしない。衣囊には十六本の小刀を持つてゐる、が無論肉を切るのではない、ミ申すのだが、ハテ、何物だらうの。』

サア、今度は大臣達や顧問官達が首をひねつてみたり、顎から長い髻が生えてるやうな恰好をしました。一向何んだか思ひ當るものありませんでした。で到頭老内

大臣が一同に代つてお答へ申上げました。老内大臣は、そつくりあの王女様のやうに、『であります、陛下、そのやうなものは居りません。存じ上げますが。』

でも王様はお聴入れになりませんでした。で結局王様は老婆の家へ至急のお使をお遣はしになることに決まりました。使者は馬の蹄から火花を散らして、宙を飛んで馳けて参りました。成程、老婆はお家の門口にチャンミ座つて居りました。

『コレコレ、老婆。』使者は馬の上から大聲に叫鳴りました。『陛下の仰せである、即刻その駄ミやらを持つて参るやうに。』

『ハイ、ハイ、お要用ならば差上げませう。』お婆さんは答へました。『たゞ御褒美には、太后様のお帽子に下に伏せられますだけの銀貨をこの婆やに下さいますならばな。』使者は再び宙を飛んで歸つて参りました。土煙りが大空まで立登りました。

『陛下、使者の者は復命致しました。老婆の申しますには、褒美として、太后陛下の御帽子の下に伏さりますだけの銀

貨をお下げ渡し下さいますならば、早速に持参致します
 ミ、斯様に申して居りまする。』

『それは大した事ではない。』ミ王様はお考へになりました。
 で、それでは望み通り銀貨を遣はそうかいふ、堅いお
 約束をなさいました。王様は直ぐその足で太后様のお部屋
 へいらつしやいまして、『お母さま、』ミ王様は仰せられま
 した。『實は一人客人が見えますが、さうかお母さまには小
 さい帽子を、さうです、あの一番小さい、お母様のお髪ぐし
 けがほんの少しかくれるあれをお著げ下さいますように。』
 太后様は王様の仰せ通りになさいました。

やがて老婆は、背中に嚴重にシヨールでくるんだ籠を一
 つ背負つて、官殿にやつて参りました。王様はもうチャン
 ミ、太后様、王女様も御一緒に廣間にお出ましになつてい
 らつしやいます。大臣、顧問官、將軍、知事達も一同ずつ
 ミ左右に居流れて、みんな片唾かたづをのんで待ち構へて居りま
 した。老婆はひびく悠然じゆんぜんにシヨールを解きにかゝりまし
 た。王様はよくその獸を御覽にならうかいふので、もう玉
 座から一足二足乗り出してさへ居られます。到頭老婆はシ

ヨールをサツミ引ひて取りました。するに籠の中からは黒
 い猫が一匹ビヨイミ跳び出して、チヨンミ玉座の上に畏し
 こまりました。

『だが、コレコレ、老婆、』がつかりして王様は叫ばれま
 した。『その方はわしをだましたな。これは何だ、猫ぢやな
 いか。』

老婆は両手を腰にあてゝ申しました。『何で御座いますつ
 て。妾が陛下をおだまし申したミ仰せられますが、さうか
 御覽下さいませ。』老婆は猫を指して大聲で申しました。猫
 は玉座にチヨコンミ座つて居ります。眼はまるで、素晴ら
 しいエメラルドのやうに輝いて居ります。『サア、御覽下さ
 います。あの眼はエメラルドでは御座いませんか。しかも
 誰一人盗んで行かうかいふ者は御座いません。それから、
 王様、チャンミ髻も持つて居りまする、それでゐる人間で
 は御座いますまい。』

『だが、コレ老婆、』王様は仰せになりました。『その猫は
 黒い毛皮をしてゐるではないか。一向に火花は出はしな
 い。』

『一寸お待ち下さいませ。』「老婆は言葉を返へしました。そして猫の背中を逆になで上げました。するに成程、かすかにピチ／＼いふ小さい電氣の火花のやうな音が聞えました。『その次は足指で御座いますが、』「老婆は言葉を續けます。『これこの通り絹のやうな足指で御座います。王女様がたゞへはだして、そして爪先で御歩きになつたにしても、さてもこゝは靜にお歩きになれるものでは御座いません。』

『イヤ、成程、解つた。』流石の王様も仕方なしに仰せになりました。『だが、コレ老婆、衣囊だの、十六本の小刀だのを申すのは一向見えないではないか。』

『その衣囊を申しますのは、』老婆は申しました。『ホレホレ、この足指に御座います。そしてこの一つ一つにまるでよく切れる小刀のやうな爪が御座いますので、ハイ。さうぞ一つ御勘定なすつて下さいませ、チャン三十六御座いますから。』

王様は老内大臣に、前へ出て爪の数を數へてみるやうに御會釋なさいました。老内大臣は恐る／＼猫の片足をつか

まへて、さて勘定しように致しましたが、猫は忽ちフツツと唸るに、いきなり稻妻のやうに老内大臣の眼の縁を引かきました。

老内大臣は眼を押へて跳び上がりましたが、『陛下、手前の眼はもう霞んでしまつて居りますが、何でも澤山御座いますやうで。手前にも四つははつきり勘定出来ましたように存じますが。』

で王様は今度は、侍従長に爪を數へてみるやうに御會釋なさいました。侍従長はよく勘定出来るやうに猫を兩手で押へましたが、これも忽ち眞赤になつて、鼻を押へて、跳び上がりましたが、『陛下、ではみんなでたしかに十二は御座いませう。手前は八つは勘定致しました、つまり左右に四つづつ。』

そこで王様は今度は、議長に爪を勘定して見るやうに御會釋なさいました。だがこの議長閣下は、猫の側へ顔を寄せると、せむしや、ひびく引かゝれた顎を押へてまたしても跳び上がりました。陛下、たしかに十六本、よく切れるやつで御座います。手前たしかに残りの四つを勘定致しまして御座

います。』

『ヤレヤレ、何をしたものであらう。』ミ王様は溜息をおつきになりました。『さていよいよ褒美をやらねばなるまい。だが、コレコレ老婆、其方はどうも仕様のない奴ぢや。』

そこで王様は卓の上に銀貨を列べるやうに御命じになりました。そして太后様の頭の可愛らしい帽子をお取りになつて、銀貨の上にお伏せになりました。でも何しろ恐ろしく小さいので、たつた五枚の銀貨しか伏せりませんでした。

『コレコレ老婆、ソレ銀貨五枚ぢや、其方にさらせる。』王様は意外に安く済んだのにホットしながら、仰せになりました。

するミ老婆は頭をふり申しますには、『王様、それは御約束では御座いません。陛下は、妾に、太后様のお帽子の下に伏さる数だけの銀貨をさらせるミ仰せになつたでは御座いませんか。』

『それがぢや、ホラ、其方も見る通り、帽子の下にはたつた五枚しか伏さららないではないか。』

老婆は帽子を手にさつて、なでてみたり、クルクル手の中で廻したりして居りましたが、悠然ミ申しました。『アノ太后様のお頭の銀色のお髪は世界中で一等結構な銀かみ、妾は存じまするが、ハイ。』

王様は老婆を御覧になり、それからまた太后様を御覧になつて、靜に申されました。『成程、それはその通りぢや。』

するミ老婆はソーツミ帽子を太后様のお頭にのせて、真白い髪を撫でて申しました。『では、王様、太后様のお帽子の下になりました銀色のお髪かみの毛の数だけ、銀貨を頂戴致し度う御座います。』

王様はすつかり仰天なさいました。額に深い皺をお寄せになりましたが、やがてニツコリお笑ひになつて、『イヤハヤ、其方は實にさんでもない奴である。』ミ仰言ひました。

でも約束はごこまでも約束です。王様は老婆の要求を聽いてやらない譯にはゆかなくなりました。で王様は太后様にお座りになつていたゞいて、それから大藏大臣をお呼び出しになつて、太后様の帽子の下に、お髪かみの毛が何本伏さつてゐるか勘定をお命じになりました。サア、そこでいよ

いよ勘定が始まりましたが、太后様はじつこ身動き一つしないで座つていらつしやるうちに——頭傾ぐつすりお寝みになりました。

お寝みになつていらつしやる間も、大藏大臣は一本一本お髪の毛を勘定して居ります。で丁度千本目を數へてしまつた時、多分一寸強くお引きしたものでせう、太后様はふこお目醒めになりました。

『オヤ、』太后様は仰せられました。『其方達は何故妾を起しましたか。妾は大變不思議な夢を見て居ました。それはこの次の王様が丁度この國の國境をお越しになつた夢です。』

こ、老婆は急に跳び上つて、おごおごしながら申しました。『それは奇妙で御座いまするな。實は手前の孫めがほんの今日隣國から私共の家へ参りましたので御座いますが。』しかし王様はそれには耳にも藉さずに仰せになりました。『お母さま、それは何處からで御座います。その次の王さまは何處の王家から参つたもので御座います。』

『それは妾も知らない。』太后様は仰言ひました。『こい

ふのは其方達が妾を起してしまつたからぢや。』

その間も大藏大臣は一心不亂に勘定をつゞけて居ります。そして太后様はまたうきうきお寝みになりました。

丁度二千本目に來た時でありました、またしても銀のお髪を強くお引きしたものでせう。

『でもまた、何故妾を起しました。』太后様は仰せられました。『妾は今丁度、その新しい王を連れて來る者が誰れあらう。この黒い猫だこいふ夢を見てゐたところですよ。』

『お止しなさい、お母さま。』王様は驚いて仰せになりました。『猫が人を連れて來るなんて、何處にそんな話があるものですか。』

『でもその通りなのですよ。』太后様は仰せられました。ヤレ、もう一眠りしませうわい。』

でまたしても太后様はお寝みになりました。大藏大臣の勘定はまだ一心不亂につゞいて居ります。三千本目——丁度それでおしまひでありましたが——に來た時に、またしても大藏大臣の手が思はず震へて心ならずもグイグイ銀色のお髪を引張つてしまいました。

『ほんまうに、怪しからん人達です、あなた方は。』太后様は大聲で仰言ひました。『年寄りをちつこも眠らせないなんて。妾は今丁度新しい王様が家族みんなを引連れて此處へ來られる夢を見て居りました。』

『ネ、お母さま、失禮ですが、そんな馬鹿なこゝは御座いませんよ。』王様は仰せになりました。『城全體を一緒に持つて來るなんて。』

『そんな放漫なこゝを言ふものではありません。』太后様は王様をおたしなめになりました。『こんなこゝが起るか解るものではないのだから。』

『それで御座いますとも。』老妾が合槌を打つてうなづきました。『太后様の仰せの通りで御座いますよ。王様、ある時ジブシーの占者が、亡くなりました手前の連合つれあひひにこゝう申したこゝが御座います。——あなたの所有物もつもの全部を雄鶏たつた一羽でついばんでしまふ時が來るからつて、そう申しましたので御座いますが、あゝ、可哀相に、その時連合ひは丁度王様と同じやうに、占師さん、そんな馬鹿なこゝがあるものかね、こゝそう申しましたよ。』

『何に!!』王様はひびくせきこんでお訊ねになりました。『ごうぢや、それがみんな偽だつたであらうがの。』

老妾はシクシク眼を拭ひはじめました。『こゝろがそこで御座いますよ。ある日、赤い雄鶏が一羽飛んで参りましてな、ソレく、王様。大事のこゝで御座いますよ。何にもかにも一切合財持つて行つてしまいました。それからつてものは、連合の氣が變になりましたな、そこら中を歩き廻つては、占師の云つた通りだ、言つた通りだつて、そう言つて暮して居りました。可哀相に、天國へ行つてもう二十年になりますだがな。』

到頭老妾は大聲に泣き出しました。太后様は老婆の頭を抱いて、頬をソーツと撫でておやりになり、『泣くのぢやありませんよ、妾までが涙が出そうになりました。』

これには王様もすつかりお驚きになつて、早速銀貨を御命令になりました。一枚一枚卓の上に列べて、到頭全部で三千枚、丁度太后様の帽子の下になつたお髪ぐみの毛の數だけになりました。『サア、老婆、持つて參るがよい。其方のやうな者が居てはわしも金持にはなれそうにもないわい。』こゝ仰

せになつて王様は御笑ひになりました。

老婆も笑ひました。人々も一緒になつて笑ひました。老婆は大きな衣囊の中に銀貨を詰めこんで、それから残りは籠の中にザク／＼入れましたが、サア重い／＼重い／＼、さうしても持ち上げる事が出来ません。到頭二人の將軍さま王様御自身で手をお借しになつて。ヤットコサ老婆にその籠を負はせておやりになりました。老婆は丁寧に頭を下げる／＼、太后様にさようならを申上げ、そして最後にも一度あの黒い猫——スーザンといふ名前の猫でした——を見ました。しかしスーザンは何處にも見えません。老婆はグル／＼見廻しながら、スーザンや、スーザンやと大聲に呼びましたが、猫はニヤン／＼も答へません、その時老婆はふ／＼玉座の蔭から小さな人間の足が二本突き出するの／＼に気がつきました。老婆はソーツミ近よつてみる／＼、王女様が玉座の後の隅つこで、ぐ／＼つすりお寝みになつて、しかもそのお膝の上でスーザンが靜かにゴロ／＼／＼咽喉をならして居ります。老婆は衣囊の中へ手を入れた／＼思ふ／＼、銀貨の一枚／＼り出して、王女様の手の中へソーツミ入れました。しかし老婆

が若し形見のつもりで銀貨を置いて行つたもの／＼すれば、それは大變な當違ひでした。王女様は目を覺まして、お膝の上に猫／＼、手の中に一枚の銀貨を見つめます。王女様は大急ぎで猫を抱き上げ、サツサミお菓子を買ひに出かけました。でも多分老婆はそれ／＼へ知つてゐたのでせう。

王女様が未だ眠つていらつしやる間に、老婆は／＼／＼／＼にお家へ歸つて、一度に／＼／＼／＼お金が出来たり、スーザンがあんなに可愛い王女様に飼はれる／＼／＼／＼になつたり、でもそれ／＼もまして、可愛い孫のジョニーがお隣の國から歸つて來たので、すつかりお婆さんは上機嫌でありました。

(つづく)

お知らせ

倉橋惣三氏は、この夏、朝鮮にお出かけになる御豫定で、講演は、京城に於て八月二日から三日間開かれるといふ／＼／＼／＼でございます。